# 23-1　とうきょう湧水めぐり２　ハケの森とハケの道を連ねて野川へ
（距離約 10.0km）

ムジナ坂辺りのハケで

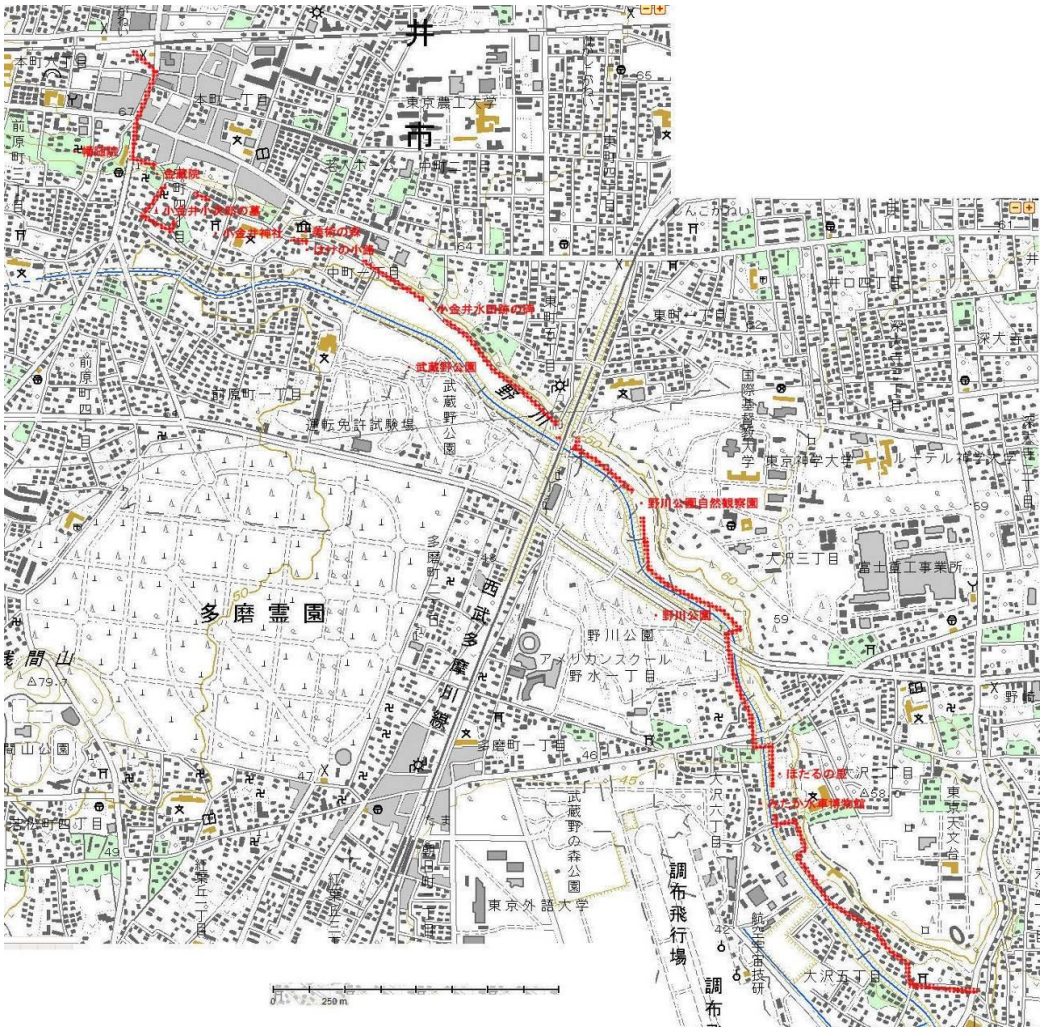
**【街歩きの概要】**

関東地方では段丘の端っこをハケと呼び、古い多摩川が刻んだハケの連なりは国分寺崖線と呼ばれて成城まで延々と続いている。「ハケの道へ１」に続けて、ハケに散在する小さな森とハケの道を連ねて野川公園まで歩く。

**【道順】**

JR 武蔵小金井駅（→なそい坂→滄浪泉園→真明寺→貫井神社の湧水）→愛宕神社から富士山→西之橋から野川→寛政六年庚申塔・イイギリ→せせらぎの小径→念仏坂→幡随院→質屋坂・妙貫坂・金蔵院・ハケの森→小金井小次郎の墓→無名坂→小金井神社→はけの美術館（旧中村研一記念美術館）→はけの小路→震災用井戸と小金井水田の跡碑→武蔵野公園→野川公園と自然観察園→出山遺跡ハケ野川の流れ→みたか水車博物館から→国立天文台下からバス

ルートマップ




小金井から国立天文台下まで

大岡昇平『武蔵野夫人』

土地の人はなぜそこが「はけ」と呼ばれるかを知らない。「はけ」の荻野長作といえば、この辺の農家に多い荻野姓の中でも、一段と古い家とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが「はけ」なのだと思っている。

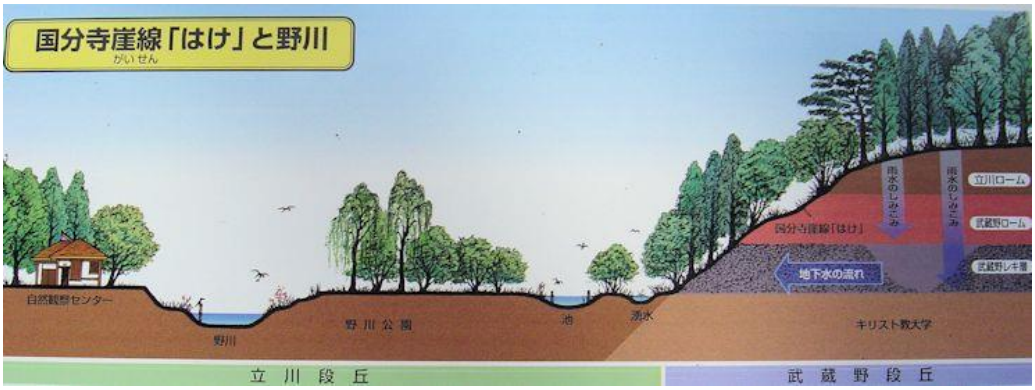
中央線国分寺駅と小金井駅の中間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは（略）。

樹の多いこの斜面でも、際高く聳える欅や櫸の大木は古代武蔵原生林の名残りであるが、「はけ」の長作の家もそういう欅の一本を持っていて、遠くからでもすぐわかる。斜面の裾を縫う道からその欅の横を石段で上る小さな高みが、一帯より少し出張っているところから、「はけ」とは「鼻」の訛だとか、「端」の意味だとかいう人もあるが、どうやら「はけ」はすなわち、「岐」にほかならず、長作の家よりはむしろ、その西から道に流れ出る水を、溯って斜面深く喰い込んだ、一つの窪地を指すものらしい。

水は窪地の奥が次第に高まり、低い崖となって尽きるところから湧いている。武蔵野の表面を蔽う壌層、つまり赤土の層に接した砂礫層が露出し、きれいな地下水が這い出るように湧き、すぐせせらぎを立てる流れとなって落ちて行く。長作の家では流れが下の道を横切るところに小さな溜りを作り、畠の物を洗ったりなぞする。

斜面一帯はこの豊かな湧き水のために、常に人に住まわれていた。長作の先祖が初めここに住みついたのも、明らかにこの水のためであって、「はけの荻野」と呼ばれたのもそのためであろうが、今は鑿井技術が発達して到るところ井戸があり、湧水の必要は薄れたから、現在長作の家が建っている日当りのいい高みが「はけ」だと人は思っているわけである。

地理・地形学の教科書かと思うほどにハケについての詳しい記述がある
『武蔵野夫人』（部分）



国分寺崖線とハケの説明看板（野川自然観察園で）

**地図豆知識：ハケという地名**

谷川の両岸の山のせまっているところを、ホキ・ホケ・ハケと呼ぶことがある。四国の大歩危・小歩危がいい例である。

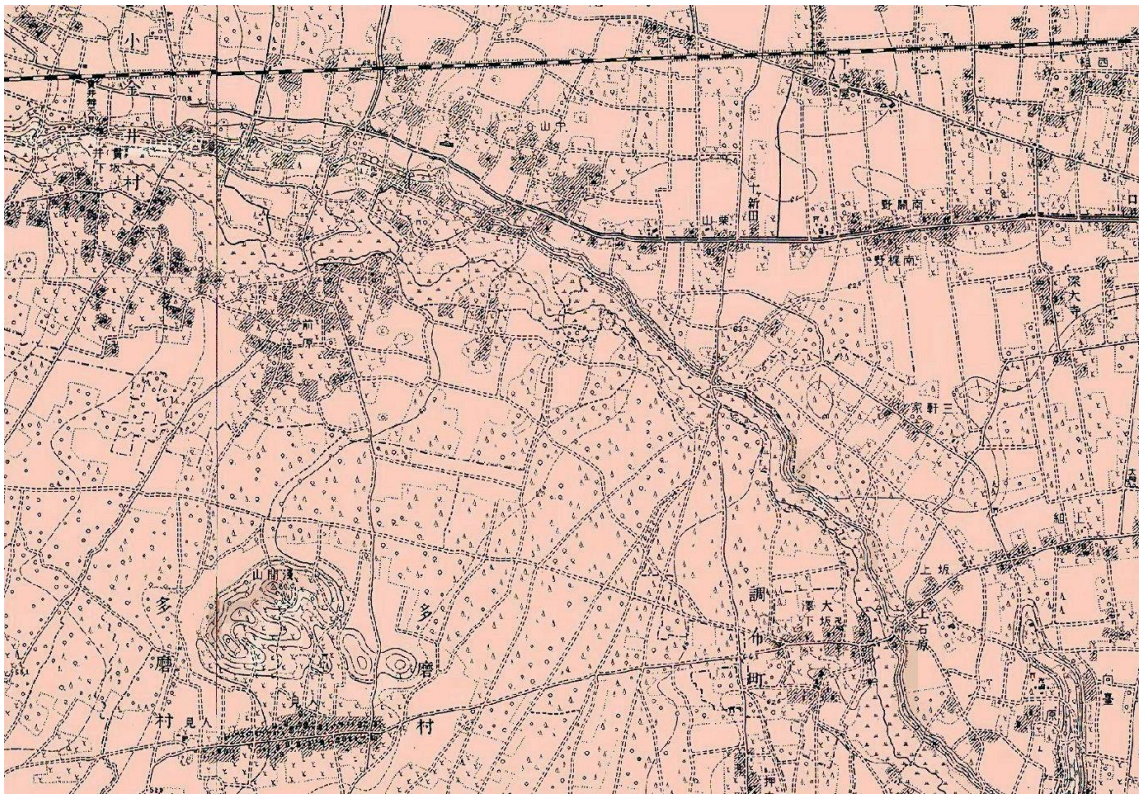
また、崖の上面を〇〇ハケとも呼び、高原の水の流れの乏しいところをコウゲと呼び、「峡下」などの文字を当てることもある。関東では「峡」をハケと読ませて、同じ高台の端の方、あるいは崖を意味する。「八景」「峡田」「峡上」「岨下」・・・などもおなじ。

**地図豆知識：谷戸（ヤト）地名から**

谷のことをヤ、またはヤツと呼ぶことは、よく知られている。世田谷、四谷、扇ケ谷、などである。後者のヤツは、鎌倉などに特有なもので、東北地方などではヤチ、他の関東地方ではヤ、ヤトと呼び、後者に谷戸の文字を当てることが多い。

東日本で使われるヤチは、湿地が始まりだと思われる。その湿地に類するものを西日本では、フケ、ウダ、ムダなどと呼ぶ。

また、ヤチの周辺のなどにある崖とその上面をハケ、側面をハバ、ママと呼ぶことも周知のことである。大間々、真間などがそれである。そして、山から水のしみ出している場所を、ニタと呼ぶ。仁田沢などがその例である。



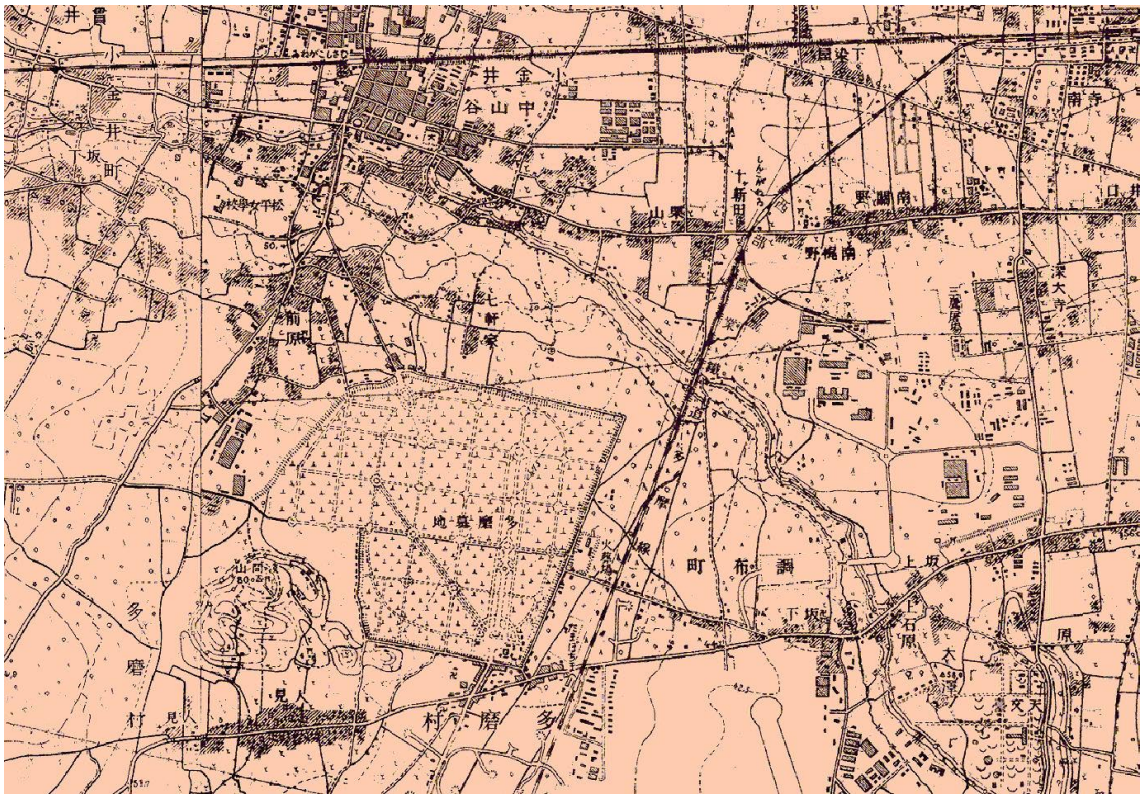

小金井から国立天文台（1/20,000 地形図「府中」M39）

道路が網の目のように発達していることが明瞭であり、このことから植生を参照しなくても武蔵野の雑木林の存在が明らかである。耕作地には、桑畑が多くみられる。

集落は東西に延びる街道に沿って発達しているほかは、玉川上水が整備され開拓が進んでいた国分寺崖線の北（武蔵野段丘）、そして野川近くの水田耕作が行われているあたりに集中している。

小金井から国立天文台（1/25,000 地形図「吉祥寺」T10）

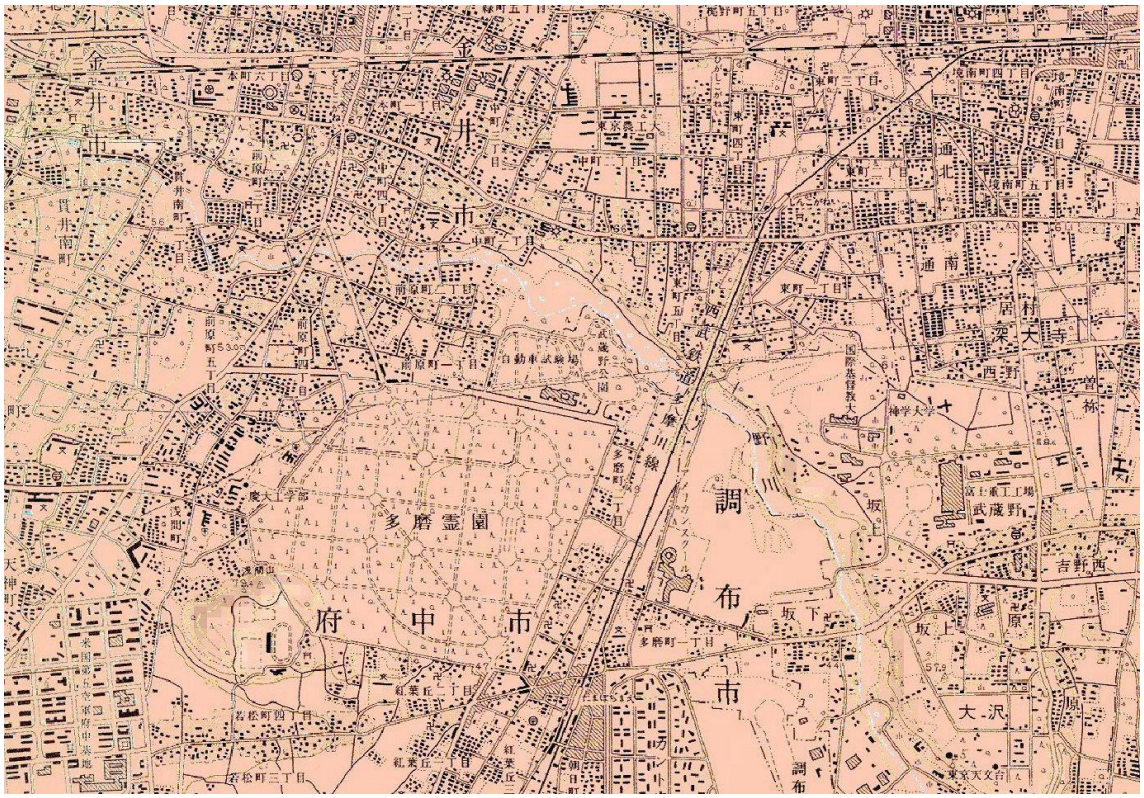
上図（1/20,000）とは、地図の縮尺と図式が異なるので単純には比較できないが、次第に雑木林と樹下の小道の減少傾向が見られる。耕作地には、未だ桑畑が残っている。そして、高圧送電線が登場し、砂利を運搬する多摩鉄道が整備され、多磨霊園の建設整備が始まっている。




小金井から国立天文台（1/25,000 地形図「吉祥寺」S22）

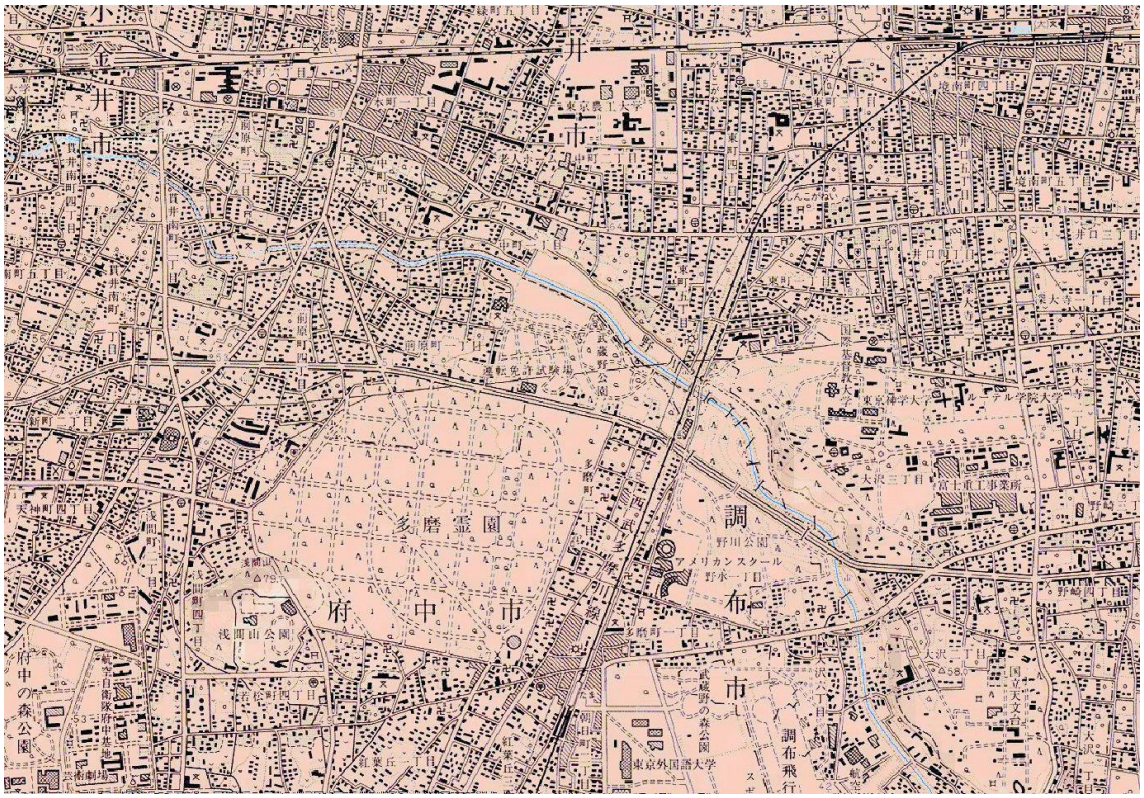
国分寺崖線の北では住宅地の整備が進み、工場の進出も見られ、砂利を運搬してきた多摩鉄道は西部農業鉄道多摩線と改称されて、駅も整備されて乗客輸送を扱っている。

多磨霊園の整備がほぼ終わって、（現国立）天文台も移転してきた。さらに南には、昭和 16 年（1941）に開設された調布飛行場の滑走路が見えて、武蔵野の雑木林の減少は明らかだ。桑畑の減少は著しいが、野川沿いの水田は健在だ。




小金井から国立天文台（1/25,000 地形図「吉祥寺」S41）

高度成長期を迎えて、国分寺崖線の北（武蔵野段丘）だけでなく、南の立川段丘上でも開発が進んで、武蔵野の面影を残す雑木林どころか、耕作地さえも少なくなっている。そこに桑畑を見つけることはできないし、野川沿いにあった水田は武蔵野公園辺りにわずかに残るだけである（昭和 45 年に消えた）。残された耕作地には、樹木畑や果樹園も見えて都市近郊型へと変化していることが明らかだ。調布飛行場とその周辺は、未だ米軍が利用している。




小金井から国立天文台（1/25,000 地形図「吉祥寺」H11）

幹線道路が整備され、河川（野川）が直線化され、都市化がさらに進展した。米軍施設は返還されて、その多くは公園や文教施設となって、ほぼ現在のようすとなった。

**【街歩き解説】**

**①JR 武蔵小金井駅**

JR 武蔵小金井駅を起点にして、湧水をめぐりながらハケの道たどりをスタートする。

関東地方では、岡の端、段丘の端っこをハケと呼ぶ。古い多摩川が刻んだ段丘は、国分寺崖線と呼ばれ、国分寺から小金井、深大寺、仙川、成城へと続いている。

古多摩川が作りだした、この国分寺崖線とよばれるハケにつらなる道をたどりながら、湧水をめぐる。

**②愛宕神社から富士山**

貫井神社の先を周り込んだ先にあり愛宕神社からは、天候さえよければ、富士山が見えるはずだ。

愛宕神社からは富士山が見えるはず・寛政六年庚申塔

**③西之橋から野川・寛政六年庚申塔とイイギリ**

この道歩きで最初に見た野川だ。水源は、国分寺の日立中央研究所の泉である。

Ｙ字路に残る寛政六年の庚申塔は、道標にもなっている。貫井共同墓地には閻魔堂と初冬には赤い実をたくさんつけるというイイギリの大木がある。

**④せらぎの小径・念仏坂**

都会人なら足を踏み入れたくなる、せせらぎの小径が住宅街の間に、短くある。弁車坂、平代坂（梶平代という人が、このあたりで水車を回した）、念仏坂（近くの墓地があって念仏を唱えた）などと、いわれのありそうな坂が次々とあって、楽しい。

**⑤幡随院（北口）**

幡随院は、明暦三年(1657)の大火以来度々火事に見舞われ湯島、浅草へと移転し、昭和13年に現在地に移転した。明暦大火の年、上野幡随院の貸地に住む牢人の長兵衛が、旗本の水野十郎左衛門に無礼があったとして斬られたという、有名な幡随院長兵衛の姓の由来となる寺院として知られている。　庭園は京都修学院離宮を模したもののようだが、非公開である。

幡随院（北入り口）・金蔵院

**⑥質屋坂・妙貫坂・金蔵院・ハケの森**

ここは、旧志木街道跡で、最も美しかったとか。命名は、近くに質屋があったからという。妙貫坂は、六つの道が交差する六道の辻からつづく、このあたりに妙貫という僧が住んでいたという坂は、かつての農道であった。

金蔵院の本尊は、中世につくられたとされる十一面観音像である。古来より民衆と垣根のない寺院であったらしく、明治時代には寺子屋、大正時代には村役場も設置された。この寺院内に湧水が集束してできた黄金井という池は「小金井」という地名の起源になったと言われている。山門横にあるケヤキとムクノキは樹齢３００年の巨木で寺のシンボルになっており、また白い萩の花が咲き誇ることで知られている。

また、随所にある屋敷跡などを整備した小さな森は、ハケの森などと名づけられて憩いの場になっている。

妙貫坂・ハケの森

**⑦小金井小次郎の墓**

小次郎は名主の次男として生まれ、新門辰五郎の兄弟分となり、関東一円に子分を三千人抱えるほどの威勢を誇ったが、あることで捕えられ、流刑になった三宅島から戻ってきた後、再度、独力で三宅島に渡り、治水事業をおこなうなどの慈善事業にも努め、明治１４年に波乱に富んだ生涯を閉じた。墓標には山岡鉄舟の筆で法名が刻まれている。

なお、墓地入口には、江戸時代・寛文六年（１６６６）の庚申塔も鎮座している。
このあたりは、金井原古戦場跡で、南北朝時代の正平七年（１３５２）に新田義宗・義興と足利尊氏が戦い、新田軍が戦勝を収めた地でもあるという。

小金井小次郎の墓・小金井神社

**⑧無名坂・小金井神社**

辺りにある無名の坂は、懐かしい階段坂だ。

菅原道真公を祀る小金井神社は、鎌倉時代の元久二年（１２０５）に菅原道真を祭神として天満宮の名称で創建された。古くから小金井村の鎮守で、明治三年に社号を小金井神社と改称した。現在の本殿は宝暦元年（１７５１）に改築されたもので、拝殿は明治２７年竣工した。例祭日は９月２５日である。

鬱蒼とした木立が立ち並ぶ神聖な雰囲気で、小金井小次郎が奉納した狛犬などの石像物が多く残されている。中でも石臼を集めた石臼塚というものは非常に珍しいものである。

**⑨はけの美術館（旧中村研一記念美術館）**

日本洋画界の重鎮として、日本美術史に大きな影響を残した洋画家・中村研一氏の私邸があった場所で、平成元年には敷地内に中村研一記念美術館が開館した。その後、同館は小金井市に寄付され、「はけの森美術館」として公開されている。

中村邸の庭園として使用されている美術の森は、大岡昇平の「武蔵野夫人」の舞台ともなった場所で、竹林の中に茶室があり一般開放されている。

はけの森美術館の裏手には、美術の森緑地と湧水がある。泉をめぐる小さな回遊路が静かで、緑が美しい。

**⑩はけの小路**

美術の森からの清水が流れる「はけの小路」は、短く、狭いものだが、いわれぬ趣があり、静かで穏やかな往来だ。そして、この辺りから、北側にはハケ、南側には武蔵野の畑が現れて、やや自然に近いハケの道がはじまる。

美術の森湧水・ハケの小路

**⑪震災用井戸と小金井水田の跡碑**

はけの森美術館を過ぎると、道の北側には竹林や雑木林が残り、南側には武蔵野の畑が少しあって、やや自然に近いハケの道がある。１万分の一地形図を広げると、８本から１０本の等高線が(比高差にして 16m から 20m)、北西から南東に傾いて束になっているのがよく分かる。

かつてを思わせるような道を注意深く進むと、風情を残した農家の敷地に震災時緊急用の井戸が残っているのが見つかるだろう。そして、台地から野川低地の水田へと通う農民が歩いたと思われる坂道が、竹林や雑木林の中に小さくある。

小金井水田の跡碑は、武蔵野公園の一画にたつ記念碑で、この水田跡の碑は昭和４５年の収穫を最後に市内から全ての田んぼが消滅したのを期に、昭和４６年に立てられたという。この辺りのハケの道には、野川低地の水田に通う農民が歩いたムジナ坂、竹林や雑木林が美しいハケが続く。

ハケの道・野川公園

**⑫武蔵野公園**

野川周辺の低地は、どじょう池もある都立武蔵野公園として整備されている。中央部には公園や街路樹に植える樹木を育てる苗田が設けられていて、バーベキュー広場や野球場

などがあり、春には約４０種類１０００本の桜が咲き誇るが、なんといっても、一番の見所は野川沿いの遊歩道である。

その後、西武多摩川線ガードをくぐって、野川公園へと向かう。

武蔵野公園・野川公園自然観察園

野川公園自然観察園付近の国分寺崖線・ホタルの里湧水

**⑬野川公園と自然観察園**

野川公園に入ると、散策やジョギングする人が多くなる。

武蔵野段丘の南縁にあたる国分寺崖線に接し、そのハケからは湧水がわきだし、 園内を野川が流れて、豊かな水と緑に恵まれた公園である。

回遊路がある野川公園自然観察園の北、国際基督教大学と間のハケは、武蔵野の自然林を想像させる。柵に囲まれた中が、自然観察園である。そして、野川公園自然観察園が終わった先に湧水がある。このほかにもハケの周辺には、いくつも湧水がある。

**⑭出山遺跡ハケと野川の流れ**

高架下をくぐった先の野川は、住宅地から離れてゆるやかに流れる。近くにあるホタルの里三鷹村には、湧水があって、ホタルのためと思われるたんぼなどもある。泉の脇には防災用井戸もあって、国分寺崖線の段丘沿いには、武蔵野の自然林が残っている。

ホタルの里脇の竹林が取り囲むハケには、出山遺跡があって、7 世紀後半ごろの横穴が保存されている。

みたか水車博物館・少し足をのばした龍源寺には近藤勇墓などがある

**⑮みたか水車博物館から東京天文台下へ**

三鷹市には、新車（しんぐるま）と呼ばれる日本でも有数の水車が今も野川沿いに残り、「武蔵野（野川流域）の水車経営農家」として東京都有形民俗文化財に指定されている。その後、東京天文台近くのバス停へ出て、湧水をめぐりながらのハケの道たどりを終える。

**地図豆知識：野川周辺のこと**

野川は谷の底を流れないで、北に斜面を背負い、南平坦で開けた地形のところにある。つまり、野川は･･･L 形の地形の角のところを流れている川である。

その野川のどの南北の断面をとっても似たような断面になって、（三鷹、国分寺がのる）武蔵野段丘、（府中、調布の）立川段丘、（多摩川河原の）沖積低地の三段の階段のような地形になっている。野川は、上段と中段の境をなす崖の直下を流れていて、この崖を国分寺崖線と呼ぶ。

それぞれの段丘に下の礫層を比較すると、昔の多摩川の川床の砂利と判断される。かつて多摩川が立川段丘を流れたときに、側方浸食によって武蔵野段丘を削ってできたのが国分寺崖線だと考えられ、いまの野川のあるところは、ざっと 2 万年～3 万年前には多摩川の本流が流れていたにちがいない。

野川の源流は、国分寺の恋ヶ窪あたりの武蔵野段丘を小さく刻む谷頭の湧水に発している。そして、国分寺崖線の武蔵野礫層からの湧水にも養われ、立川礫層の地下水も野川にしみだしている。ふだんは、雨水よりもむしろ地下水に涵養されている川である。

先土器時代の遺物発見地の分布をみると、武蔵野台地でもっとも分布が密なのは国分寺崖線の上端付近の関東ローム層の中からである。武蔵国分寺が野川の南に造営され、深大寺もまた野川の前にある。野川の水は弥生時代から昭和30年代に至るまでの安定した水田の用水であり、飲用水でもあったのだ。（「富士山の自然史（貝塚爽平著）」より）

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　Yamaoka　mitsuharu　　+＊＊＊+